

平成20年度「新たな公」によるコミュニティ創生支援モデル事業

モデル事業名	再生された廃校を活用した高齢者地域のコミュニティ活性化支援事業
対象地域	熊本県天草市牛深町元下須・天附地区(下須島全域)
活動概要	<p>天草市牛深町に位置する下須島は、天草諸島南端に位置し、面積4.5平方km、669世帯、人口1,410人の島である。かつての基幹産業であった沿岸漁業の衰退により人口流出と高齢化(高齢化率40%)が進行し、地区内にあった天附中学校が廃校となるなどコミュニティの活力低下が大きな課題となっている。</p> <p>また、高齢者が多い当地区においては、高齢者の「健康の維持」、「移動手段の確保」と高齢者の「平日日中の非常時の対応」等の課題も抱えている。</p> <p>平成19年度には、地域福祉の向上及び市民活動の促進による地域の活性化を図るため、廃校であった旧天附中学校を多機能型複合施設(名称:南風ん風)として整備を行い、交流の場としての受け皿づくりに着手した。</p> <p>しかし、真に切実な地域課題を拾い上げ、解決することが地域コミュニティ活動の活性化に繋がるものと考え、H20年度からは課題解決のためのヒト(人材)やモノ(地域資源)、コト(組織や活動)をつなぎあわせるための小さな実践づくりを行う予定である。</p>
今年度の主な取組	<p><u>①地域課題の発掘</u> 住民の一人ひとりが感じている地域課題を発掘するために、下須島内全世帯を対象に地域における生活課題を調査するためのアンケートを実施する。 アンケートの構成は、「高齢者化した地域住民の交流」「高齢者の健康・生活の維持」「移動手段の状況」「その他」の視点に基づいた内容とする。</p> <p><u>②住民による地域課題解決のための仕組みづくりと共有</u> アンケートにより見出された「住民の一人ひとりが感じている地域課題」をより多く語り合い、身近な暮らしレベルまで掘り下げて抽出するためのワークショップを行うものとする。 ワークショップの対象者としては20～80歳代の幅広い年齢層で多くの住民が参加できるように、アンケートの回答結果から選出するばかりでなく、「南風ん風」運営推進評議会も加えたメンバーも加えた20名程度で構成し、開催は10～11月に3回、2月に1回の計4回を予定する。 また、ワークショップでは、島の将来像を踏まえた解決すべき課題を集約し、住民が主体となる解決策として出された様々なアイデアを連携させ、ヒト・モノ・コトをつなぎあわせたプラン作りを行う。</p> <p><u>③ミニ社会実験の実施・運営と地域住民によるふりかえり</u> 地域コミュニティ再生に向けてのワークショップの話し合いから見出されたプランの中から、地域にふさわしい実践策を地域住民が主体的に選択したものをミニ社会実験として実践する。 前述の地域課題抽出の3項目「交通移動手段の問題」「地域活動の参加、機会の減少」「地域共同作業の衰退」の中から、高齢者の交通移動手段を確保するために、多機能型複合施設(南風ん風)を発着所とした福祉移送サービスとデマンド型乗合タクシーを兼ね備えた「下須島お助け交通」のモデル実験を一般乗用旅客自動車運送事業者の協力を得て、3回(1週間連続×3回:11月～1月)行う予定とする。 モデル実践の終了後には、利用者からのアンケート(ヒアリング)を基に、その運営についての課題や継続的な実施に向けての方針決めに関して、再度、ワークショップを行い振り返るものとする。</p>
活動結果	<p>今年度は、「地域活動の発掘」、「下須島住民による地域課題解決のための仕組みづくりと共有」、「ミニ社会実験の実施・運営と地域住民によるふりかえり」の3つの柱で行った。</p> <p>「日本の宝島“天草”づくり」を掲げる天草市の中で、必ずしも行政主導の地域活性化策が機能してこなかった旧牛深町の突端に位置する下須島地区において、「新たな公」を活動の担い手とする本モデル事業がどのように地域住民に受容され、どのような成果が期待されるかという、新しいスタイルの事業を提案したことに第1の意義があったと考える。</p>

活動結果	<p>第2の意義は、住民アンケート調査及び住民参加型ワークショップ(4回)の実施により、「地域課題の発掘」、「地域課題解決・改善の提案」というプロセスを丁寧に進め、地域政策を住民自らが作ることに成功したということが成果としてあげられる。</p> <p>その「提案」の1つは、ミニ社会実験「下須島お助け交通」の具現化として検証にかけられ、その「達成された成果」と「残された課題」をきちんと共有化することが出来た。「提案」、「実施」、「評価」というPDSサイクルを踏まえることにより、今後の方向性が明確になりコスト管理も含めた事業の「持続可能性」が見えてきている。</p> <p>第3の意義は、まさに全国の「高齢問題」の縮図である下須島において、「新たな公」の理念を可視的な仕組みとして提示できたことである。「下須島お助け交通」の社会実験では、現在は何とか自力で自動車運転ができる「若い高齢者」が将来的には「交通弱者」に転じることを見通し、今のうちにずっと住み続けることが可能な地域社会に形成しなおす必要性を確認し、それを実現するための仕組みを提案することができたと考ええる。</p> <p>住民自身ができること、行政の援助を受けながらできること、すなわち「自助」と「公助」の間に、まさに「社会の形成者」として地域住民が関わる「共助」というスタイルを構築することの社会的な意義が検証されたと思っている。</p> <p>今後は、多機能型複合施設である南風ん風を「井戸端拠点」として再生することが有効であると考え、その拠点を集落の中心と捉え、生活機能(買い物、郵便、医療、文化・交流等)の集約化を図り、その施設までの交通手段の確保と組み合わせた活動を実践していくことが、コミュニティ創生に必要な手段と考える。</p>
当初予想していなかった効果	<p>アンケートの回収率が想定を上回ったことが挙げられる。一般に郵送配布の場合30%程度と言われているが、配布した後の全世帯への訪問によって、52%の回収率を得た。また、高齢者の単独世帯の内、入院中や島外での生活者も相当数あり、不在者を除く回収率は70%近くに達成し、この事業に関心を寄せてもらうきっかけとなった。</p> <p>しかしながら、こうした調査はこれまで行政により行われるものがほとんどだったために、その後の社会実験等の全てが行政によるものとの誤解を生じた面もある。地元ではNPO活動への理解は未だ不十分であるため、当初は「してもらう」という意識が強かった面があったが、4回目のワークショップ終了時には、「自分たちで出来ることもある」といった意識の変化が感じられ、自分たちの暮らしを共助しながら活動を継続することが、NPOへの理解や参加、ひいては協働へと発展するものと思われる。</p> <p>行政依存型から「公」を担う新たな存在としてNPOを認知してもらう機会になったことや、その担い手がひょっとして自分たち自身であるということに気づき始める事業になったことが一番の成果と感じている。</p>
実施状況(写真)	<div style="display: flex; justify-content: space-around;">   </div> <p style="text-align: center;">【写真】「下須島お助け交通」のミニ社会実験での利用風景</p>
応募団体名	特定非営利活動法人 ひと・学び支援センター熊本
リンク	<a href="http://blog.canpan.info/haenkaze/">http://blog.canpan.info/haenkaze/</a>
部局/担当者名	事務局長 松崎 景子
連絡先	096-354-7252
推薦市町村名	熊本県天草市